

2007年04月15日

「大和王権と胸形君（むなかたのきみ）たち」

県と福津市、宗像市が取り組んでいる世界遺産登録活動。中心となる沖ノ島と津屋崎古墳群などは、大和王権を支えた人々の足跡を示す文化遺産群として脚光をあびています。今回は、大和王権を支えた人物像にせまります。

日本書紀の胸形君

8世紀に書かれた『日本書紀』には、天武（てんむ）天皇2（673）年春2月1日に、壇上（たかみくら＝祭壇）を設けて即位式をした記述があり、皇后と側室や皇子たちの紹介もされています。そのなかに「胸形君徳善（むなかたのきみとくぜん）が女尼子娘（むすめあまこのいらつめ）を納（め）して、高市皇子命（たけちのみこのみこと）を生（な）ませり」という記述があります。

高市皇子命は、672年に勃発した大和王権内のクーデター「壬申乱（じんしんのらん）」で活躍し、太政大臣（だじょうだいじん）となった人物です。母親は、尼子娘。娘の父親は、海路を掌握して海人（あま）とよばれる集団の長として、宗像地域に君臨したと考えられる胸形君徳善です。

お墓から分かる階級

高市皇子命のいた時代の墓は、大化2（646）年3月22日に、権力や財力の象徴とする墓づくりを皇子以上、上臣（たかきまえつきみ）、下臣（ひくきまえつきみ）、大仁（だいにん）・小仁、大礼（だいいい）以下～小智（しょうち）、庶民（おおみたから）に6区分されていました。

天皇から小智までは、薄割の石材を組み合わせ、箱形にした「石槨（せつかく）式石室」とよばれる石室に漆で塗り固めた棺を納めるもの。奈良県明日香村にある「高松塚古墳」などもこの墓の一つです。一般の人の墓は、穴を掘って埋めるだけのものでした。

天皇から小智に許された石槨式石室は、九州ではほとんど見られませんが、宗像地域の福津市「手光波切（なみきり）不動古墳」はこの石室になります。石槨の長さ2・1m、幅1・3mで、下臣クラスの規模です。胸形君徳善の子か孫であれば、太政大臣高市皇子命の叔父かいとこにあたり、この石室が宗像地域にあることはうなずけます。



手光波切不動古墳

2007年05月15日

「文献からみた沖ノ島」

沖ノ島で、4世紀から10世紀にかけて、大規模な祭祀が行われていたことは、これまで広報紙で紹介してきましたが、今回は、文献から見た沖ノ島を紹介します。

日本で最も古い歴史書といわれる書物「日本書紀」に、天照大神（あまてらすおおみかみ）と素戔嗚尊（すさのおのみこと）の誓約（うけい）によって田心姫神（たごりひめのかみ）・湍津姫神（たぎつひめのかみ）・市杵嶋姫神（いちきしまひめのかみ）の三姫神が発生したという記事があります。宗像神は、8世紀代には、すでに三神一体の神として認められていたこととなります。

古代になると沖ノ島に関する文献は、不思議となくなり、逆に宗像本土の宗像大社に関する文献が増えてきます。沖ノ島が文字として記されるのは、元寇（弘安の役）の16年後、永仁4（1297）年『夫木和歌抄』（ふぼくわかしょう）に詠まれた「うつ波に 鼓の音をうち添えて 唐人よせぬ 沖ノ島守り」で、大陸からの侵入に対する危機感を表現したものと解釈できます。

宗像大社では、このころ、年中行事を詳しく記録した「正平23年宗像年中行事」（1368）があります。現在、「宗像神社文書」として国の重要文化財に指定されているものです。これによると、年4回（春夏秋冬）沖ノ島神事として、現在の「みあれ祭」の原形とされる御長手神事（みながてしんじ）が行われていたことが分かります。

このように、古代から祭祀の規模や形は変わっても、沖ノ島に対する信仰は今も昔も変わらないものと思われます。



日本書紀

2007 年 06 月 15 日

「大和王権と胸形君（むなかたのきみ）たち 2」

今回は、世界遺産登録事情に続き、大和王権を支えた人物像にせまります。

8 世紀に書かれた『日本書紀』に、天武（てんむ）天皇 2 年春に即位式があり、皇后や側室、皇子たちの紹介もされています。「胸形君徳善（むなかたのきみとくぜん）、尼子娘（あまこのいらつめ）、高市皇子（たけちのみこ）」といった宗像に関係の深い人物の名も見ることができます。

尼子娘は、天武天皇の側室で、父親が胸形君徳善、子が高市皇子です。天皇の外戚となった徳善は、海路を掌握していた海人（あま）とよばれる集団の長として宗像地域に君臨。大和王権の新羅などとの対外交渉を支えた人物と考えられています。

その奥つ城（おくつき＝墓所）は、市が福津市と連携して世界遺産登録に取り組んでいる、宮地嶽神社奥の院の宮地嶽古墳と考える説があります。

古墳は江戸時代の中ごろの山崩れで発見され、石室の長さは、約 23 メートル。奈良県にある日本最大の陵墓参考地（りょうぼさんこうち＝天皇や皇子たちにつながる墓のこと）見瀬丸山（みせまるやま）古墳の 28・4 メートルの次に長いものです。

石室内からは、金銅装馬具（こんどうそうばぐ）、緑瑠璃板（みどりるりいた）など豪華な出土品が発見され、国宝として一部は九州国立博物館に展示されています。

石室の壮大さや出土品の豪華さから、葬られた人の地位の高さがうかがわれ、「被葬者を大和王権と外戚関係にあった胸形君徳善」と、考える説が浮上することも自然のように思われます。



日本第 2 位の長さを誇る宮地嶽古墳

2007年07月15日

「世界遺産登録までの今後の予定」

世界遺産に登録するためには、まず、国内の暫定リストに掲載されなければなりません。昨年11月に市と県、福津市は、「沖ノ島と関連遺産群」と題して、提案書をまとめ、文化庁へ提出しました。今年1月に継続審議となり、暫定リスト掲載のための課題が示されました。このとき、暫定リストに掲載されたのは、「富岡製糸場と絹産業遺産群」、「富士山」、「飛鳥・藤原 - 古代日本の宮都と遺跡群」、「長崎教会群とキリスト教関連遺産」の4件でした。

文化庁から出された課題をクリアするために、福岡教育大学教授や宗像大社神宝館学芸員らからなる専門家会議を3月から月1回のペースで開いています。専門家会議では、考古・古代・中世の各専門家の意見を元に提案書の再作成に取り組んでいます。

また、この遺産の価値や重要性を広く知ってもらい、取り組みに対する理解と協力を得るため、コミュニティ単位で講座などを開催しています。

さらに、今年12月2日には、国際的視点から沖ノ島を考える国際シンポジウムを九州国立博物館で開催する予定です。

最終的には12月28日に提案書を文化庁へ提出します。その審査の結果、来年には暫定リスト掲載の可否が決まります。



(宗像大社 高宮の様子)

2007年08月15日

-沖ノ島の至宝（鏡）-



三角縁二神二獣鏡（宗像大社神宝館蔵）

沖ノ島での発掘調査で出土した品物は、一括して国宝に指定され、宗像大社・神宝館（田島）に収められています。

国宝に指定された品々は8万点にもものぼりました。中国や朝鮮半島でつくられたものやシルクロードの西の果てからもたらされた逸品も含まれていることから、沖ノ島は、『海の正倉院（しょうそういん）』ともよばれています。

写真の鏡は、沖ノ島の岩上祭祀（がんじょうさいし）（*1）18号遺跡から出土したものです。鏡の縁の断面が三角形をしているところから「三角縁（さんかくぶち）」とよばれ、鏡の背面の模様には「二神（にしん）（*2）と二獣（にじゅう）（*3）」をそれぞれ2対表現しているところから鏡の名称を「三角縁二神二獣鏡（さんかくぶちにしんにじゅうきょう）」とよんでいます。

この図案は、中国古代の神仙思想（しんせんしそう）（*4）に現われる仙人の東王父（とうおうふ）と西王母（せいおうぼ）や、中国の霊獣二つが画題で、中国の内情に詳しい職人の手によってつくられた鏡であることが推測できます。

とくに神仙思想に現れる西王母は、周の穆王（ぼくおう）を桃源郷（*5）に遊興させ、国に帰ることを忘れさせた仙人として、説話になっています。

この説話は、日本の「能」の演目にもなっていて、海を越えた中国の思想が、日本の文化に融合した事例です。

沖ノ島の1枚の鏡。じっくり観察すると、中国の思想や日本文化を語る歴史文化の語り部ともなる逸品です。

- *1 岩上祭祀＝高さ5メートルを超すような大きな岩の頂にこぶしくらいの大きさの石を並べて四角形の祭壇を設け、真ん中に少し大きな石を立て、神を降臨（こうりん）させて祭祀をしたところ
- *2 二神＝中国の古代神仙思想に登場する東王父、西王母とよばれる男女の仙人
- *3 二獣＝青龍（せいりゅう）と白虎（びやっこ）の霊獣
- *4 神仙思想＝不老不死（ふろうふし）の薬を求め、修行することで仙人になり、不老不死の力を得ると考える思想
- *5 桃源郷＝理想郷

2007年09月15日

-沖ノ島の禁忌（きんき）（前編）-



大島北側にある沖津宮遥拝所

沖ノ島に禁忌があることをご存じですか。禁忌とは、してはいけないこととして禁じられたことで、昔から、地元の人たちもずっと守り続けてきています。今回は3つの禁忌を紹介します。

1番目は「不言様（おいわずさま）」です。沖ノ島で見たり聞いたりしたものは、一切口外してはならないというものです。このことが、沖ノ島の歴史的価値や重要性が全国的に広まらなかった原因の一つとも考えられています。

2番目は「一木一草一石（いちもくいつそういつせき）たりとも持ち出してはならない」です。沖ノ島から一切、何も持ち出してはいけないというもので、このことが、遺跡が1600年間、手付かずの状態を守られてきた最大の要因ともなっています。

最後は「女人禁制（にょにんきんせい）」です。文字どおり女性は島に渡ることができないというものです。理由は、神様が女性であることで、やきもちをやくという説や、沖ノ島までの渡島は女性にとって体力的に厳しいからという説など、さまざまです。

また、現在は、高齢者など体力的に参拝が難しい人も渡島ができないようになっています。そうした人たちのために、大島の北側、岩瀬地区に「沖津宮遥拝所（ようはいしょ）」を設け、沖ノ島を遥か仰ぎ見て参拝することができるようになっています。

実際に天気などの条件がそろえば、沖ノ島を拝むことができる場所です。

2007年10月15日

-沖ノ島の禁忌（きんき）（後編）-



上陸前の禊

今回は、前回に引き続き沖ノ島における禁忌（*）について紹介します。

前編は、「不言様（おいわずさま）」「一木一草一石（いちもくいつそういつせき）たりとも持ち出してはならない」「女人禁制（にょにんきんせい）」でした。今回は「上陸前の禊（みそぎ）」「4本足の動物を食べてはならない」「忌（い）み言葉」についてです。

「上陸前の禊」は、沖ノ島へ上陸する時に、必ずしなければならないしきたりです。沖ノ島に上陸すると、最初に着衣をすべて脱いで、首まで海に浸かり、心身を清めます。禪（ふんどし）姿などは認められません。この禊をした後、ようやく島への上陸が許されるのです。

次に「四本足の動物を食べてはならない」です。沖ノ島の島内では、牛や豚などの四本足の動物を食べてはいけないことになっています。魚肉ソーセージや鳥のから揚げは大丈夫だそうです。

最後に「忌み言葉」です。島内や近海では、ある特定の言葉をきらい、別の言葉に換えて話すということが行われていました。例えば、「死」や「酔」、「塩」などはそれぞれ「くろやうせい」、「みみとり」、「なみのはな」などに言い換えていました。

大島の漁師は、こうした忌み言葉を常に覚えていて、実際に言葉をうっかり使った場合は、船頭から海へ突き落とされたといわれています。この忌み言葉は昭和に入ったころには、すっかり昔語りとなったようです。

沖ノ島の神秘性が保たれているのは、こうした禁忌によって、守り続けられたことが一つの要因とも考えられます。

（*）禁忌とは、してはいけないこととして禁じられたこと

2007年11月15日

-海を越えた勾玉（まがたま）-



東郷高塚古墳出土勾玉（市教育委員会保管）

今回は、関連遺産群の1つ「東郷高塚（とうごうたかつか）古墳」から出土した勾玉を紹介します。

沖ノ島で大規模な古代祭祀が執り行われた4世紀後半ころ、宗像高校（東郷）南側の丘に、築かれた前方後円墳（*1）が東郷高塚古墳です。

この古墳の後円部には、一人の被葬者を埋葬するには長い、5メートルを超す割竹形（わりたけがた）木棺（*2）が納められ、何重にも粘土で覆い固められていました。

この規模の埋葬施設のある古墳は、西日本地域ではあまり見られず、被葬者の強大な権力を示しています。

中からは、勾玉や管玉（くだたま）などの装身具、鉄製の刀や剣、矛などの武器が発見されています。特に、勾玉は、宝石のヒスイを材料として作られた品物でした。

ヒスイの原産国にはミャンマーや中国新疆（しんきょう）ウイグル自治区南部などがあります。国内では、新潟県朝日町や糸魚川市（いといがわし）などの海岸でも採集できます。

朝日町や糸魚川市は、昭和39年、勾玉や玉つくりの遺跡が発見され、ヒスイ製玉つくりの一大産地であったことが確認されました。

想像をたくましくして、東郷高塚古墳で発見された勾玉を見てみると、ヒスイをもとめて大海原に船を漕ぎ出した「胸形（むなかた）の海人」が、日本海側に沿って北東に流れる対馬暖流に乗って、新潟県を目指し、南西に流れるリマン海流に乗って、帰還する海洋ルートを、すでに確立していたと考えることができるかも。

東郷高塚古墳で発見された小さな勾玉1つ。じっくりと観察すると、古代海洋ルートを語る逸品となりそうです。

*1 前方後円墳＝空から見ると鍵穴のような形をした古墳

*2 割竹形木棺＝大きな木の幹から丸太材を切り出し、竹を縦割りにした形に製材する棺

2007年12月15日

—宗像の遺産—

世界遺産登録を目指している「宗像・沖ノ島と関連遺産群」は、世界的に見ても歴史的価値がある文化遺産です。しかし、それだけで宗像の歴史を語ることはできません。

みなさんが生活している住宅地や道路、公園など便利で快適な土地も、昔は山や海岸や集落などさまざまな場所でした。見晴らしの良いところでは古墳が造られ、山には狩猟のための落とし穴などがあったことでしょう。

実際、宗像ユリックス本館やゆ〜ゆ〜プールのある場所は、ほとんどが古墳群でした。メイトム宗像は集落跡に建設されています。城山や許斐山は、城跡（中世の山城）です。

市には遺跡そのものを公園として整備しているところもあります。平等寺瀬戸遺跡、久原澤田古墳群などです。遺跡公園は、小学校の教材としても活用されています。教科書に出ているものを、直接見て触れることができる宗像ならではの生きた教材です。



平等寺瀬戸遺跡を活用した体験学習

こうした遺産は、一度壊すと元に戻すことができない貴重な文化財です。この機会にまわりの文化財について考えてみませんか。

●お知らせ

「宗像遺産〈文化遺産編〉」好評発売中。市役所総合案内か各地区コミュニティ運営協議会まで問い合わせを。



沖ノ島と関連遺産群提案書

2007年12月27日

宗像市・福岡県・福津市が合同で、平成19年12月25日に文化庁へ再提出した世界文化遺産国内暫定一覧表への追加提案書です。

提案書はこちらから、ご覧ください。

[表紙・目次](#) (PDF 207KB)

- (1) [提案のコンセプト](#) (PDF1, 157KB) 1 p ~ 4 p
- (2) [資産に含まれる文化財](#) (PDF2, 469KB) 5 p ~ 19 p
- (3) [保存管理計画](#) (PDF, 645KB) 20 p ~ 21 p
- (4) [世界遺産の登録基準への該当性](#) (PDF1, 092KB) 22 p ~ 23 p

2008年01月15日

—海人たちの夢のあと—



金銅製飾履復元品

世界遺産登録を目指す「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の一つ、国指定史跡の桜京（さくらきょう）古墳（牟田尻）は、前方後円墳を含む200基ほどの古墳があつまる大規模な遺跡です。今回は、この古墳群から出土した金銅製飾履（こんどうせいしょくり）（*1）を紹介します。

この金銅製飾履は、全国で20個ほどしか発見されていない珍しいものです。韓国の忠清南道（ちゅうせいなんどう）の武寧王陵（ぶねいおうりょう）などからの出土が、よく知られています。

武寧王陵は、「寧東大將軍百濟斯麻王」（ねいとうだいしょうぐんくだらしまおう）（*2）と記された刻字（こくじ）石板（*3）が出土したことで、6世紀前半代に百濟（くだら）国の王であった武寧王夫妻の墓であることが実証されています。

とくに武寧王＝斯麻王は、倭国（日本）で生まれたという逸話もあるほど、日本と密接な関係を持っています。

ここで、想像をふくらませて古墳群から出土した「金銅製飾履」をみると、古墳は小規模なのに、韓国の大王墓と同様の逸品がある。これは、玄界灘の航路を掌握し、百濟国や大和王権との橋渡しを担った「海人」たちが、恩賞としてこの逸品を入手したもので、古墳群は、この「海人」たちの墓所と考えることもできます。

金銅製飾履は、「海人」たちの眠る古墳群に秘められた「夢のあとからの贈り物」です。ここには、まだ、多くの謎や贈り物が秘めていることでしょう。わたしたちは、この古代からの「夢のあと」を見守り、次世代に引き継がなければなりません。

*1＝銅に金をメッキした金属板を材料にしてつくられた飾りをつけたクツのこと

*2＝「中国の東の国々を平和に治める大將軍である百濟の斯麻王」という意味

*3＝埋葬された被葬者の名前や業績などを刻んだもの

～沖ノ島を世界遺産に～国内暫定リスト追加記載へ文化庁に提案書を提出

2008年01月15日

(1) 市が県と福津市と共同で取り組んでいる「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録活動。文化庁に12月25日、国内暫定リスト追加記載への提案書を提出しました。審査結果は4月以降に発表される予定です。

沖ノ島と関連遺産群は、「海の正倉院」とも呼ばれる沖ノ島（神湊の沖合60キロ）を中心に、大和王権が古代の対外交渉に伴う航海の安全を願った祭祀遺跡などです。対馬海流にはぐくまれた独自の生態系なども大変貴重なものです。

谷井博美市長は、「8万点を超える国宝をはじめ、両シンポジウムでも先生方から世界遺産に十分に値すると、力強いエールをもらった」と国内暫定リスト追加への期待を話しました。

提案書は、市のホームページ

http://www.city.munakata.lg.jp/shinai/keyword/keyword_inf.php?contents_id=9607&div_id=77&keywd_id=208から見ることができます。



(高塩・文化庁次長（右端）に提案書を提出する檜崎洋二郎・県教育次長、谷井博美・宗像市長、池浦順文・福津市長)

(2) 東京と九国博でシンポジウムを開催・沖ノ島の価値をPR

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の価値を広く知ってもらうため12月24日、早稲田大学でシンポジウムを開催しました。これに先立ち、12月2日には九州国立博物館で国際シンポジウムを開催。2カ所での開催で、これまで沖ノ島を知らなかった人にも広く知ってもらい、暫定リスト記載へ弾みをつけました。シンポジウムの内容は広報紙2月15日号で紹介します。

2008年03月15日

—宗像大社の社殿—

神社といえば、独特な雰囲気を持った社殿（建物）を思い浮かべる人も多いのではないのでしょうか。その社殿は、いつごろ造られ始めたのでしょうか。

縄文時代の集落などで見つかる大型建物が、神を祀る社殿ではないかと言われています。また、神社建築の型は、伊勢神宮の神明造が穀倉から、出雲大社の大社造が古代住居から展開したと言われています。

宗像大社では、古墳時代に入って沖ノ島で祭祀が行われていますが、まだ、社殿はなく、自然の森や岩などをご神体としていました。

8世紀に書かれた古事記や日本書紀に3姫神が登場し、初めて沖津宮（おきつみや）、中津宮（なかつみや）、辺津宮（へつみや）の名が見られます。

8世紀から9世紀にかけては、沖ノ島で露天祭祀が行われていました。中津宮周辺のろくどん遺跡や辺津宮の高宮祭場周辺でも、祭祀品が見つかり、それぞれに露天祭祀が行われていたのではないかと考えられます。

宗像大社の社殿は、いつごろ建てられるようになったのでしょうか。鎌倉時代末期に書かれた「宗像大社造営代々流記」には、宝亀7年（776年）に荒廃した社殿を改築したという記事がありますが、定かではありません。「中右記（ちゅううき）」には、元永2年（1119年）神殿造立の記事があり、このころには社殿があったことが分かります。

現在の辺津宮本殿拝殿は、天正年間（1573～1592年）に再建された社殿で、国指定重要文化財に指定されています。



宗像大社辺津宮本殿拝殿

沖ノ島バーチャルミュージアムオープン

2008年03月15日

～海の正倉院をのぞいてみよう～

沖ノ島バーチャルミュージアムが3月5日（水）に開館しました！

市では、日ごろ行くことができない「沖ノ島」を知ってもらうために、動画やアニメーションなどを使って、分かりやすく紹介する「沖ノ島バーチャルミュージアム」を市ホームページに開設しました。

財団法人地域活性化センターの平成19年度合併市町村地域資源活用事業の助成金を受けて制作。

沖ノ島の地形や歴史・文化、国宝の指定を受けた出土品、独特な生態系、関連する遺産などをリアルな画像で紹介。出土品の解説や、年表、用語辞典などの資料も掲載し、一目で沖ノ島の魅力が分かります。

あなたも沖ノ島を仮想体験してみませんか。



沖ノ島バーチャルミュージアムはこちら

<http://www.city.munakata.lg.jp/okinoshima>